森林レンジャーがゆく

ビオトープに集う日

（78）

森の子コレンジャーの活動も今年度で７期目です。活動の中で、第３期から継続している「ビオトープ整備」は５年目となり、50～60年前まで谷津田であった場所は「水場から生まれる命が多様な命をつなぐ場所」として息を吹き返しています。

昨年の11月23日には、ビオトープに関わった森の子コレンジャーの卒業生が集い、同窓会という形で整備を行いました。内容は、台風の影響で荒れてしまった昔道や池を整備し、現役生が安全に活動するための準備です。作業前に、ビオトープを利用する野生動物をセンサーカメラの映像で確認し、自分たちが関わった場所の今と今後必要となる整備を確認しました。小学校５年生から高校１年生までの11人が協力して主体的に活動している姿を見て、ビオトープに対する気持ちはみんな変わっていないのだと感じ、嬉しく思いました。

イノシシのヌタ場となっていた場所には、産卵にくる両生類や昆虫などが戻り、生態系のバランスを保つ役割を持っている捕食者のキツネやイタチ、フクロウ、ヘビなどが利用するようになりました。イノシシは、地元の猟師さんのおかげもあり減少してきました。周辺の森はメダケや

同窓会に集まった11人。みんな、ありがとう！

倒木などで人が活動できない状況でしたが、子どもたちが活動するための広場を作り、小型哺乳類や野鳥が利用する場所として整備を続けています。

しかし、昨年からセンサーカメラにシカが映り始めたため、伐採した木やチャノキをせん定して池に下りるシカ道を塞いだり、池の周りにシカ除け柵を作り始めました。シカが来るようになってからは、池を荒らすだけではなく、日が当たるように整備した林床に出た実生も食べられてしまい、私たちの希望までシカに摘まれてしまったような気持ちになりました。

それでも、池は水場を利用する生物のための場所であり、関わった森の子コレンジャーの大切な場所でもあるので、人間の理想と自然の関係は「やって、見続けて、工夫していく」ほかないと、これからも試行錯誤を重ねようと思います。（加瀬澤）